

中国・韓国再訪

田尻聡子



間と共に中国へ旅立った。私にとってこの旅行は古都の町並みもさることながら私の心の中の戦後史に小さな終止符を打ちたいとの願いもあった。

最終目的地、西安へは中国の代表的な古都、開封・鄭州・洛陽を経由していった。開封は北宋の国都、鄭州は夏・殷の都、洛陽は周から唐まで九王朝の都として栄え、遣隋使、遣唐使が訪れた縁の地である。洛陽郊外に中国三大石窟の一ツ龍門石窟がある。五世紀の北魏時代に造営がはじまり以後、東魏・西魏・北周・隋・唐・宋と幾百年の歳月を費し転変の歴史の中で営々と彫り続けられた石窟である。佛十万余・佛塔四百・石窟二千有余の中国屈指の一大大文化遺産である。北魏は天下平定後、あまたの異民族を掌握してゆくために国家的紐帯として佛教をとり入れ龍門石窟造営に至ったという。旧ソ連邦が異民族を繋いでいったマルクス理論も斯くやかと偲ばれた。北魏時代、一窟をつくるのに二十年間、八十万人の工人を要したという。偉容を誇る文化遺産のかけに民衆の血と汗と涙の呻きがきこえる。若し石工達に己が刻んだ優美なる佛の姿を拝し、しばし法悦にひたるひとときがあったらと、祈らずにはいられなかった。

僅か一年数ヶ月であったが中国で活らした。敗戦前の四ヶ月と戦後の一年間である。天国を垣間みる機会はなかったが、修羅・殺生・飢餓・畜生道と様々な地獄を覗いてきた。少女時代への懐しさも手傳い幾度か中国・韓国旅行を夢みた。心の中で揺曳する何かが渡航の願いを何時も委えしほませてきた。今年の夏、西安市から「全国町並み保全連盟」招聘の案内があり十八人の仲

洛陽の馬路（大通り）は車道、歩道ともユックリと広く無剪定の大樹が見事な緑のトンネルを作っている。ニセ

アカシア・桐・ポプラ・エンジュが街路樹に多い。開封から洛陽までの街道沿いの大樹はどの木も根本から一・五メートル位、白い石灰が塗り込められている。蟲よけと車の標識という。城内（市内）の馬路は馬や車ならぬ自転車埋めつくされていた。

洛陽の市の花は牡丹、西安は石榴の花である。ザクロとリンゴの樹が西安郊外の並木を作っていた。石榴、まさにシルクロードそのものである。三千年の古都と言われる西安は十一の王朝の都で特に唐の時代は長安として中国全土の政治、経済、文化の中心であったと、十キロ四方の城壁に囲まれた城内に整然と王宮、市街が並び平城、平安建都のお手本であったよし、シルクロードからの外国人の往来も繁く当時、世界有数の国際都市であったろう。

今日、西安を代表する一級の文化遺産は七世紀に建てられた大雁塔である。私共が西安市からいただいた記念章（バッジ）のデザインはこの大雁塔であった。十六年間の取経の旅を終えた三蔵法師（玄奘）が印度から持ち帰った經典、佛像を収めるため建てられた煉瓦づくり七層（六七メートル）の塔である。この春、福岡県で全国町並みセミナーが開かれた。その時のゲストスピーカーが西安の著名な建築家 張錦秋女士で、女史は大雁塔の隣接地に唐代芸術博物館・唐歌舞ホール・唐華賓館（ホテル）

を一体の施設として設計した方である。大雁塔の景観を中心とした歴史的・傳統的空間の現代化というテーマで語っておられた。私共がその唐華賓館に宿泊した一ヶ月後、天皇が旅の疲れをこいで癒やされた。

一九八六年に完成した西安駅舎は古都にふさわしい瓦屋根の中国様式である。西安の文化遺産、町並みは私共を充分に楽しませてくれたが、それにも増し張女士をはじめ西安の方々と温かなふれあい、特に高高興典的（ガウグンジン）うれしかった。

中国旅行でのカルチュア・ショックと興奮がまだ治まらぬ某日、韓国光州市から急ぎの招待状がきた。函館のユネスコ協会と光州のユネスコ協会は年来の姉妹協会の間柄、その光州で韓国ユネスコ全国大会が開かれるのは是非出席されたいとのこと。一行四名が千歳から直行便でソウルへ飛んだ。韓国の土を踏んだのも中国同様、四十年ぶりである。ソウルは戦中時代三回通った。一度は女学校を卒業し両親がいる満州へ行つた時、二度目は京都女専へ入学した春、三度目は京都空襲で怪我をし頭を繻帯で包んで渡満した時である。

当時ソウル近郊の山々は赤茶けた荒涼とした山なみであったが今回の旅行でソウル盆地を囲む南山・仁旺山・北岳山・駱山における緑の再生をきかされ

た。宿泊した新羅ホテルから望まれる南山に綾なす紅葉がまぶしかった。

植民地時代、多くのソウル市民にとり手近かな燃料は山の樹を伐るしかなかったという。

ソウルの街路樹は西安同様、見ごとな大樹で澄みきった晩秋の空いっぱい黄金の枝を拡げる銀杏の並木が殊の外美しかった。

韓国はいつこの地を訪れても日本人として歴史の傷の深さにたじろがされた。

十四世紀の頃、李王朝は十二万坪の敷地内に二〇〇余棟の壮麗な宮殿を建てたが、十六世紀、秀吉の壬辰倭乱で王宮は烏有に帰したとのこと。その後、明治維新と同じ年、即ち一八六八年に第二六代高宗の父君、近代の英傑といわれた興宣大院君が民族と王家の威信をかけ今日の景福宮その他の宮殿再建に着手した。然し一九一〇年、韓国併合まもなく李王朝の中央宮殿である景福宮の真前に日本帝国の権力を誇示するが如き朝鮮総督府庁舎が建設された。同庁舎の建築学的評価は別としても伝統的な宮殿とは全く異質な近代建築物が歴史的、文化的環境を破壊したことになる。一九一二年、日本政府が朝鮮総督府建設予定地を発表した時、許しがたい暴挙と反対の意志を表明した日本人は唯三人、柳宗悦・今和次郎・関野貞の諸氏であったという。

開放後、植民地時代の日本の建築物

を破壊し撤去しようとの声が全土に沸きたったそうだが、恨みの建物が眼前からなくなっても歴史的事実は消えるものではないと。敢えて保存にふみきったという、朝鮮総督府庁舎は今も景福宮の真前にあり文化財に指定され博物館として使用されている。一九二六年創建当時、東洋第二の華麗な建物と賞讃されたソウル駅舎は今も現役で史跡指定となっていた。

ソウル市内の街路樹の下で何度か鵠を眼にした。ソウルの人達は朝カササギに出あうと、その一日よいことがあると、中国では鵠を特に喜鵠イ・ハクと呼び愛でている。鵠が年に一度の七夕の夜、牽牛・織女の逢瀬のために天の川に橋を架ける鳥だという古くからの民間伝承が思い出される。鵠は多分、海を渡って九州へも行ったのだろう。中国・韓国・日本は民話の世界に於いてさえも共通のルーツを持つお隣り同志。鵠の様に海を越えた友好の橋をいくつもいくつも架けたいものです。

一九九二年十一月
(全国町並み保全連盟常任幹事 函館市在住)